

『塩原多助一代記』における二つの物語

——多助の立身出世譚とおかめの因果応報譚——

丸山 美智子

I はじめに

三遊亭圓朝演述『塩原多助一代記』（さいゆうていゑんちやう しおほらたすけいちだいき）は、主人公塩原多助（たすけ）が継母おかめに虐待され、愛馬青（あお）に別れを惜しんで江戸に出たのちに、刻苦して立身する話である。多助のモデルは、上州沼田（ぬまた）にある新治村（にいしむら）より江戸に出て本所相生町（あいおいちやう）に薪炭商を営み成功した塩原屋太助（しおばらやたすけ）（一七四三—一八一六）とされる。この斬は一八七六年（明治九）から一八七八年（明治十一）に口演された「塩原多助一代記」という人情斬をもととして、一八八五年（明治十八）に速記刊行された。大変な人気を得たことで、口演から約十四年後、速記刊行から七年後にあたる一八九二年（明治二十六）三代目河竹新七により歌舞伎として脚色劇化。主演五代目尾上菊五郎（おのえきごろう）が善人多助と悪人小平（こへい）を一人二役で上演して拍手喝采を受け、以後は講談や謡曲といった演芸作品の中に取り入れられてゆく。江戸本町相生町の炭屋塩原太助の実話に基づくもので、浪士の子に生まれながら、わけあって百姓の養父のもとで育てられた塩原多助が、養父の死後、後妻となっていた継母おかめと女房の悪性のために青と別れて一人江戸に出て、炭屋で十数年の骨身を惜しまぬ奉公の末、独立し豪商になったという出世物語として有名である。多助の災難の原因を生み出す悪役は、女房おえい、道連れ小平という盗人、その母おかく、継母おかめなど

と数多登場する。しかし、作品中の悪行は継母おかめを軸とするものと考えてよい。おかめ一人の毒婦性がいかに高いかを証明する手がかりとして、第六回のおかめの悪性を示した部分を引用する。

お龜はどうか丹治と一つになり度が、さうするには多助を追い出さなければ邪魔に成てなりません、多助を追ひ出すには如何したら宜らうと考へますと、又悪智の出るもので丹三郎も未だ單身ものなり、どうか丹三さんとお榮と色にでも成たなら、私も丹治さんと供々に末永く樂しめるだらうと思ひまして、主あるお榮に色事を勧め、丹三郎と密通をさせ、母子同志で奸通を致し、誠に宜しからぬ事で、

この直前にも「殊に家來右内と密通して家出をした位の浮氣もので御座いますから」と記され、おかめの悪質な素性について強調する結果となつてゐる。作品内にはおかめ以外にも、妻おえい、盗人おかくの家族の一人である小平ら大勢が悪人として登場するが、本稿では養父角右衛門の死後に態度を一変させて淫乱・卑俗な様子で描かれ始めるおかめの位置づけに着目したい。

圓朝による「塩原多助一代記」の完成は一八七八年（明治十一）とされるが、寄席口演は一八七五年（明治八）から開始され、一八八五年（明治十八）に速記本として初版本が刊行された。後に修身の教科書において第八回の愛馬青との別の場面が教材として採用掲載されたことも影響して、十二万部という売れ行きをみせ、当時としては異例のベストセラー作品となる。教科書への採用理由は、第一に、政府による修身教育の方針に合った記述が盛り込まれた人情噺であったことがあげられる。第二に、速記本製作者たちの漢字採択の方針が当時のリテラシーの有様に合ったことにも目を向ける必要がある。『塩原多助一代記』はそもそも速記本として刊行されたため、著者による推敲がなされたわけではない。速記本であるがゆえに、落語を喋る噺家の圓朝はあくまでも演述者であり、速記者の若林珥藏と助手酒井昇藏は筆記者。この

ほか、刊行にあたって漢字採択の助言を与える関係者も存在した。漢字採択に関わった人々が、当時の教育方針を念頭において助言を施したと仮定するならば、助言の前提となった漢字使用の方針を明らかにせねばなるまい。この点に関しては今後の課題とし、次稿で取り扱うこととする。

本稿では、おかめによる毒婦の悪性を強調した前半の展開から、田舎から出てきた主人公多助の善性を強調した後半の展開に注目し、明治政府の修身教育の方針に落語家圓朝らがどう呼応したのかを明らかにしたい。

Ⅱ 『塩原多助一代記』梗概より

『塩原多助一代記』の創作経緯については、圓朝自身が語った人生の波乱万丈話をまとめた、朗月散史著『三遊亭圓朝子の傳』（『三遊亭圓朝の履歴』）に詳細な記述がある。事の発端は、友人の絵師柴田しばたせしじ是真しんに持ちかけられた江戸の炭商塩原家の実話の怪談化であった。しかし圓朝は、史実再現にあたって実地踏査を進めるうち、江戸本所の炭商塩原太助が財を成した出世話のほうに興味をそそられ、怪談でなく、実在人物である太助をモデルとする多助の成功を語る伝記断として高座にかけた。『塩原多助一代記』の梗概について、青木正次あおきせいじは次のようにまとめている。

筋の前半は多助の育ちをめぐる受難物語で、武士の子多助が農民の養子となり、養母と妻のいやがらせと姦通にあつて家を捨て郷里をひとり出奔するまで、後半は彼が江戸で炭屋の奉公人から身を起こし、正直と孝行と商法によって大商人となる立身成功談からなる。（略）中世以来の民衆的な生活救済幻想の型である「貴種流離譚」を踏まえて、近世封建社会の底辺にあえぐ民衆像に近代社会の「開かれた社会」という幻想を連結させた構成をなす。近代化に伴う農本的な家族の崩壊と都市貧民化の現実を、岩崎、古河、浅野など明治の政商「新貴族」像とを結びつけ、近代社会

の救済幻想を民衆レベルで表現したものとなった。(略)また円朝の文体「語り口調」は、生活民多助の話し言葉もつ素朴な時間性をまると切りとり、物語の筋に並べ入れるという方法で、生活民の自然な生活意識がそのまま近代社会の生成の原動力となるかのような表現を作り出した。(略)近代日本の民衆が新たな教育制度に取り込まれる以前のわずかな時期に、それまで民衆のわびしい娯楽場にすぎなかった寄席に新時代の「開かれた社会」という理念表現を担わせることで、社会的な成功を得た。

(大隅和雄ほか編集『増補 日本^{架空}伝承人名事典』平凡社、二〇〇〇年八月)

青木は当時の社会状況に照らして詳細に分析し、「農本的な家族の崩壊と都市貧民化の現実」を描出。近代社会の救済幻想を民衆視点から具象したことで単なる娯楽落語ではない人情斬を生み出した点を評価している。『塩原多助一代記』は、当時の教育勅語発令の機運に乗って、現在で言うところの道徳教科書『尋常小学校修身』(八尾書店)中に徳目「恭儉己ヲ持シ」の例として採用された。圓朝の没年でもある一九〇〇年、「国民ノ模範タルベキ人物ヲ揚ゲ、興味アル具体的事例ニヨリテ、道徳的感情及道徳的意志ヲ修養センコトヲ期セリ」という理由に見合ったために教科書へ取り上げられた。第八回の愛馬青との別れの場面は、現在も落語「塩原多助一代記」の演目中でも昭和の落語家に最も語り継がれ、唯一CD化されている。諸演芸に伝承される「家族崩壊、郷里出奔の悲哀表現」と、教科書に採録された「公的倫理」を広める目的でつくられた教材との二つの側面を保ちつつ、多助像は受容されてきた。以降、「家族崩壊、郷里出奔の悲哀表現」の前半、「公的倫理」の後半という構成上の分離の実際とその理由に目を向けて考察する。

Ⅲ 二分された物語としての考察

一、二分される物語展開

『塩原多助一代記』は、第八回における愛馬青と主人公多助の別れの場面から第十回に多助が身投げするほど追い込まれた状況を山口善右衛門に救われる場面までの展開が重要な物語の分岐点となっている。この分岐点では江戸の神田（現在の千代田区）に架かる昌平橋（万世橋）での身投げとその救済を機に、災難続きであった多助の運命は好転する。さらに第五回で、養父角右衛門が塩原家繁栄のために残した遺言をさしおいて継母となった（実の叔母でもある）おかめは、家の崩壊を招く行動に出る。原丹治・丹三郎の侍親子登場によって、第六回以降のおかめは一転して淫乱な婦人と化す。圓朝は第五回終盤におかめの毒婦への豹変を予告する形で第五回の漸を閉じ、第六回以降、それまで悲劇の良女として描かれていたおかめの姿は豹変していく。

殊に家来右内と密通して家出した位の浮気もので御座いますから、酒の上とは云ひながら、遂に丹治と密通致し、お龜ハ深く丹治を思ひますが、世間の手前、多助の前もあります、（略）お龜はどうか丹治と一つになり度が、（略）多助を追ひ出すには如何したら宜らうと考へますと、又悪智の出るもので（略）主あるお榮に色事を勧め、丹三郎と密通させ、母子同士で奸通を致し、誠に宜しからぬ事で、
〔第六回前半より〕

一年後の八月朔、おかめおえい母子と丹治丹三郎父子は、離縁状を書いて多助おえい夫婦の離婚を成立させようとする。おえいの持つてきた多助が落としたという分家のおさくからの艶書を種にするものの、あえなく失敗に終わると、おかめ

は丹治に多助殺害を依頼する。五日の宵（時間は当時の四ツ時）庚申塚手前で手綱を引く主人を先へ行かせまいとして歩かなくなった青の働きによって多助は助かるが、代わりに親戚の圓次郎えんじろうは誤殺されることとなる。

おかめは自分の娘に密通を勧めて丹三郎とおえいをくつつけた挙句、多助殺害を依頼することで彼の追い出しに成功し、主人公の対となる完全な悪女と化した。しかし、おかめの運命は第八回の青との別れと第九回後半の山口善右衛門との出合いの間に織り込まれた第九回前半場面を境に、第六回・第七回において多助の運の好転と対照的に急落していく。後に、おかめは連れ子をかかえた盲目の乞食となつて多助の前に現れるのである。

二人の運命が逆転することは、初版本に載っている各編の見出しからも明らかになる。各編に一題ずつ漢文体二文の見出しが付けられているが、第九回だけは漢文体一文の見出しで、途中に副題が添えられている。『明治文学全集10』（筑摩書房、昭和四十年六月）から全見出しを抜き出してみる。

第一回 山村主從語二奇遇一 忠僕苦心レ危二其身一	第七回 冤罪不レ解恨愈長 奇禍已迫志暗決	第十三回 小平奸計奪二證書一 多助慧眼破二騙術一
第二回 殺二忠僕一獵夫會二親族一 失二愛兒一旅婦逢二知己一	第八回 沼田原頭紅涙雨 岩上河邊白刃電	第十四回 乞レ資結レ約在レ為二自家之計一 捐レ金修レ路將 謀二公衆之便一
第三回 寡婦嘆レ命農角偏說レ運 兇漢 誤レ事士角 幸 免レ厄	第九回 忠僕 怨二非道一拒レ婚 ○ 孝子 哀二薄命一赴レ死	第十五回 救二危急一角右初名二其子一 數二貯蓄一善石更 勵二其人一
第四回 少女罹レ災却得二幸福一 老婆說レ恩將 逞二邪惡一	第十回 淫慾自招苦外 凶 謹儉 偏 甘 苦中樂	第十六回 說二來路一盲婦 偏 懺悔 察二前途一奇女切 戀慕
第五回 一家喜憂 輻二病夫之枕邊一 終 世苦樂 生二孤兒之身上 一	第十一回 嚴父 遮二慈母一勵二孝子一 奸夫 伴二淫婦一會二毒尼一	第十七回 企圖不レ違眞奇遇 意氣相投是良縁
第六回 淫婦誣レ罪孝子 苦 姦夫伏レ 謀 良馬知	第十二回 以レ毒制レ毒造化之奇形 捨レ利計レ經濟之妙法	第十八回 親子 重レ義志 愈 堅 夫婦守レ 儉家益富

第十一回・第十二回も話の途中に副題はないものの、区切る記号の「○」を付けて二編に二つの物語が組み込まれている。第十一回と第十二回「○」前後の展開は、多助とおかめの運命を対に二分された場面展開がみられる。このように、多助とおかめの運命の分岐点として据えられた第九回前後に目を向けると、単に多助の立身出世譚として描かれたわけではない『塩原多助一代記』のもう一つのテーマを読み取ることが可能になる。

二、裏の主人公、毒婦おかめ

本作の第一回は、主人の塩原角右衛門（多助の実父）を探す岸田右内（おかめの駆け落ち相手）を主人公に据えた書き出しとなっている。さらに前半部分では、多助の叔父右内、実父角右衛門、養父角右衛門らが幼少期の主人公多助の配役代行者としての役割を担う。しかし、第二回に待つ右内の死は、単に展開を結ぶ役割としてではなく、裏に潜む塩原角右衛門（実父）の奥方（実母おせい）の妹おかめという存在を、前半の主人公として後に引き立たせたいがための仕掛けとも捉えうる。前半には裏の主人公おかめの毒婦としての生き様や悪者としての描かれ方の問題がある。前半は右内の死、圓次郎殺害という登場人物の死に加えて、多助が悪女による密通といじめに耐え忍びながら泣き暮らすというように、物語の暗さが際立っている。反面、後半は丹三郎、おえいの死や丹治おかめの逃亡、おかく家族という悪党の衰退と対照的に、出世に向かう多助の様子が滑稽に明るく描かれている。後半において重視すべきは、儉約・貯蓄・忍耐・勸善懲悪・農民の貧窮や田舎者の扱い方である。後半に至り、多助の人物描写は一層純真で堅実な男として強調されており、立身出世の Handbook として多助を扱ったことが感じられる。

圓朝は第九回をどのような展開で語ったのか。記録された物語から辿る限りにおいて、善と悪の運命逆転を意識した〈枕〉（落語における前置き話）を挿入していることが分かる。第九回冒頭は圓朝のナレーションから始まり、落語の〈枕〉として善悪の心についての「煩惱」を説く。その後、「迷えば可愛い子を捨て、夫を棄てるやうに相成りますと申すは、前申上げました通り」として、第八回におけるおかめの毒婦ぶりをなぞりながら導入となる説明に入る。次に、話題の切り替えが行われる。

此方は今内祝言の盃を取らうとする所へ太左衛門が物をも言わずに上つて来て、祝言の座敷へドツサリト坐つて、これから談判を致しますと云ふお話しに成ます。鳥渡一息つきまして。

この直後に「○孝子 哀 二薄命一 赴レ死」という中見出しが入り、因縁について運を説く（中枕）を前置きとして加えることで話題転換がなされている。

多助のやうな好人は神も佛も附添て居るかと思ふと、前回に申上たやうな難澁な目に遭ひ、自分が率馴れた馬に別れを告げて、漸く岩上村へ掛りますと、胡麻の灰道連の小平と仁助に會て土足に掛けられ抜刀を附付けて、さア金を出さなければ殺すぞと云ふので、

この後、昌平橋（万世橋）での自殺未遂は多助の人生の分岐点となる。投身未遂の境界となる場面では、善性の強い多助と悪性の強いおかめの運命の逆転という「運」についての展開が仕組まれているのである。

三、刊行時期との関係

『塩原多助一代記』発案当時は、「三条の教憲」など政府からの発令をきっかけに、史実に基づく創作への希求が高まっていた。一八七五年（明治八）に逮捕された高橋お伝の事件に材をとった作品も多く創られ、『高橋阿伝夜刀譚』、歌舞伎の『綴合於伝仮名書』などへの脚色化がなされて話題を呼んだ。高橋お伝事件に取材した作品については、『文体…日本近代思想体系16』（岩波書店、一九八九年一月）を参照することで、ほぼその全貌をうかがい知ることができる。世間での流行に目をつけた政府は、仮名垣魯文に対して世に貞節を説くための創作を要請、仮名垣はそれに従って『高橋阿伝夜刀譚』を刊行した。こうした毒婦物ブームは、新聞に連載された仮名垣魯文の〈続き物〉『鳥追阿松海上新話』、その弟子久保田彦作の〈続き物〉『鳥追阿松の伝』が新聞紙上で人気を得たことに端を発している。明治二十年頃までの新聞・雑誌が扱った高橋お伝逮捕の一大ニュースは、『塩原多助一代記』の発案時期も近く、圓朝はこの事件を少なからず意識したに違

いない。仮名垣魯文に対して政府から要請のなされた新聞界に属していた圓朝がそのことを耳にして取材した可能性は高い。一八七五年（明治八）当時、圓朝は『郵便報知新聞』での文筆活動にも力を入れていた。一八七四年（明治七）、『東京日日新聞』に入社して後に社長となる福地桜痴（源一郎）とも交友があった。更に、速記本としての刊行にあたって政府や知識人からの推奨意見も参考とし、それまでの人情漸には考えられなかった、義理・勤儉・忠孝といった素材を含むことに繋がったのだらう。

二〇〇九年十月に関西大学で開催された第13回研究会／第6届日本漢學國際學術研討會での増田周子の報告（「明治期の文学者たちの漢文漢字問題」）では、速記本と後の文学の関係について、以下のように言及している。

漢学から洋学へと移行していく時代にあつた明治日本では、漢字節減論、ローマ字採用説、日本新字創案、仮名専用説などの諸説が開された。また庶民などには、風変わりな新漢語を使う風潮もみられた。坪内逍遙のように、軽率にどの文体がいいなどと結論付けるべきではないという意見を持つ文学者があつた一方、最適な表記法を模索し続ける文学者たちが存在した。その後、『怪談牡丹燈籠』などの言文一致体を試みた速記本の刊行が見られ、山田美妙、二葉亭四迷らの文学者を中心とした言文一致体運動が行われていった。これに対し賛否両論が開されたものの、最終的には教育の上でも言文一致体が行い入れられていき、言文一致体の方針が確立する。そこでの明治期の文学者たちが果たした役割は大きいものであつた。

言文一致への文学者らの試行錯誤と教育的配慮の結果、速記刊行には漢字使用についての示唆があつた。最適な文字表記の模索がなされ、漢字廃止論など文体改良への意見も多様にあつた当時は、速記本の誕生を一分岐点として文字の変化が起きたといえないだろうか。

後、歌舞伎界・講談界など各芸能界の芸術作品などでも『塩原多助一代記』を基盤とする立身出世譚作品の宣伝がなされる。例えば、歌舞伎脚本『売炭翁青馬曳綱』ばいたんおのおのひみつな 塩原多助一代記（明治二十五年八月）、水月庵主人によって戯作化された『塩原多助実伝』（明治三十一年五月）、青葉散士編『浪花節口演会』美文的フシ入り（明治四十五年五月）などに脚色されている。落語でも、三遊亭金馬は『塩原多助後日譚』ごじつたなを口演し、明治三十五年一月に速記本として刊行されている。その他にも、『塩原多助一代記』は、芸能各界での脚色劇化以外にも多くの場面に影響している。経済的な教訓書として『塩原多助経済鑑』（明治二十二年六月）、修身教育の教材として『尋常小学単級修身訓 教員用 甲、乙編』（一九〇〇年十二月）にも「青の別れ」の場面（第八回）が掲載される。偉人伝を多く著した碧瑠璃園による伝記『塩原多助』（一九一九年三月）など、以降の「多助」は多くの図書において他の偉人らと並び称される実在人物、道徳的な見本となる人物として紹介されることとなった。このように、「塩原多助一代記」は立身出世を初めて強調した創作噺という点で評価を得ており、明治社会の「立身出世」という新趣向を含んだことよって、歌舞伎よりも低価格で観られる落語・講談など演芸での宣伝に加えて、安価な速記本という形式の誕生によっても階級の低い人々に受け入れられていった。つまり、これまでになく趣向を取り入れた人情噺として創作された圓朝の「塩原多助一代記」は後に速記本として刊行されたことで、青年たちの向上心を鼓舞する読み物として役立つことになった。以後、立身出世を掲げ胎動してゆく日本社会の近代化への橋渡しをすることに繋がったといえよう。

IV 『塩原多助一代記』前半から後半にかける展開変容の理由

前半において身を潜めるかのように影の薄い多助は、後半部にてようやく主人公として本領を発揮し、立身出世を果たす。『塩原多助一代記』は一八七六（明治九）に発案、一八七九年（明治十一）に完成したとされるが、刊行は明治十八年

一月〜三月、現在はこの刊行時点に纏められた刊行物以外、実際に寄席で口演した蓄音記録などは残っていない。噺の完成から刊行化に至るまでの七年間、圓朝が寄席でどのように噺を口述したかを窺い知ることはできないため、噺の変容の有無や過程は分からない。しかし、政論及び教育論が喧しく叫ばれる時期にあつて、その影響ゆえの内容変化が生じたはずである。

また、西欧啓蒙書として明治三、四年に刊行された『西国立志編』^{さいこくりつしへん}は、日本の教育に大きく影響した立身出世の概念を初めて盛り込んだ翻訳書として異例の売り上げを記録しており、読者家としても有名な圓朝がこの点に目に留めないとは思えない。後に国民国家形成という近代化を担うことになる『塩原多助一代記』創作経緯には、読書家でもあつた圓朝の読書活動から生れた部分もあろう。

森銚三は、圓朝研究に役立ちそうな著書と自身の耳にした事柄を『新編 明治人物夜話』第二部「三遊亭圓朝」の中でまとめている。その中に、圓朝が『西国立志編』を読んでいた事実が示されている。

今一つ、昭和十二、三年頃だったろうか、梅の盛りの頃に、藤浦さんの玉川の別荘に立ち寄って、茶菓の饗応にあずかった。そしてご主人から、円朝の話なども幾つか聴いたのだったが、三周氏のまだ子供であつた頃に、円朝が「坊っちゃん、この本はいい本ですから、読んで御覧なさい」といって、一冊の書物をくれた。その書というのが、実に中村敬宇の訳すところの『西国立志編』だったそうである。円朝と『西国立志編』と、この対照は意外のようでもあるし、意外ではなかったようにも解せられる。そしてただそれだけの話にも、円朝の人物の窺われるもののあることを感ずるのである。

森銚三はこの記述の前に、信夫淳平^{しのぶじゅんぺい}（漢学者である信夫怒軒^{しのぶどげん}の息子）著『反古草紙』^{ほんこそうし}（有斐閣、一九二九年）の中で書

きまどめられた圓朝に関する漢文による伝記の訳を載せている。信夫淳平の文章訳を見ると、朗月散史著『三遊亭圓朝子の傳』（『三遊亭圓朝の履歴』）にある内容が八割を占め、二割ほど自分の交友事実を付け加えた内容だと判断できる。『西国立志編』は、教育の場面に立身出世の概念を植えつける契機をつくった書物でもあった。

ここで、教科書への採択理由の一つ目にあげた修身教育へ目を向けよう。そもそも修身教育とは、第二次大戦前の初等・中等学校に設けられた現在の道徳教育の前進となる教科、修身科の教育を意味する。明治前期において修身教育の動きには大きく三つの段階に分けられる。

第一期、一八七二年（明治五）の学制で設けられた修身科は、当時流行った西欧啓蒙書を翻訳した『西国立志編』にみる立身出世を真似る形で、翻訳教科書による修身（後には小学校では修身口授Ⅱ「ぎょうぎのさとし」と呼ばれる）、修身（中学校での呼称）として登場する。『西国立志編』は、一八七〇年（明治三）～一八七一年（明治四）に中村正直（敬字）によって翻訳刊行された。S・スマイルズの『自助論』Self Help（一八五九年）を原典とする西洋偉人や英雄の小伝記であり、産業革命期のイギリス精神を訳出している。日本人の立身出世への意識を啓蒙する「明治の聖書」として一躍を担い、ベストセラーとなった。また、『日本歴史大事典』には次のように記される。

その主張は「天は自ら助けるものを助ける」という言葉に表れており、成功への鍵に勤勉・克己・剛毅・節儉という徳目をあげ、当時の青年を立身出世へと駆り立てた。

一八七五年（明治八）に加藤弘之が著した『国体新論』の概説からは、当時の社会動向を窺い知ることができる。同じく『日本歴史大事典』から引用しよう。

すでに『隣艸』(一九六一年)、『立憲政体略』(一八六八年)、『真政大意』(一八七〇年)で欧米の近代立憲政治を紹介していた加藤は、本書で天賦人權論に依拠して国学者の国体論を論破、当時最も急進的な民主主義的政治論を展開し、自由民権運動に理論的根拠を与えた。だが、のちに優勝劣敗論に転じて自由民権思想を攻撃し、『真政大意』とともに本書を自ら絶版し、一八八二年には『人權新説』を発表して国家主義思想家へと急転身した。

第二期、一八八〇年(明治十三)の第二次教育令において首位教科となるほど重視され始めた修身科は、仁義忠孝の儒教的内容を強調した。しかし、森有礼が文部大臣に就任すると、森は個の自発性を根幹とする愛国心教育を主張し、徳育注入の儒教主義修身を批判した。一八八七年(明治二十)、啓蒙思想家の西村茂樹は、帝国大学(現東京大学)講堂にて前年十二月に三回にわたり講演した「日本道德論」の内容をもとに、哲学書院より『日本道德論』を刊行。本書は政府要路を主として一〇〇部余献呈され、他にも一〇〇部余売却するも、伊藤博文内閣を誹謗する箇所があると非難されて一時は絶版。しかし、文部大臣の森有礼の忠告に従って問題箇所を削除訂正した後、一八八八年(明治二十一)に再版され、以後版を重ねた。国民の品性を育成するために必要な徳目として勤勉・節儉・剛毅・忍耐・信義・進取・愛国・天皇奉戴の八項目を掲げることで道德学の構成を示し、法や制度によらない国民像形成の指針を提示した。当時の欧化政策を憂いた西村は、日本道德を軸としつつも、儒教や西洋道德といった東西道德の内容と比較し、長所を織り交ぜることで新たな和魂洋才の国民道德を提唱。ただし、愛国・天皇奉戴の条目に明らかなように、国粹主義の立場からは脱しえなかった。

第三期の一八九〇年(明治二十三)には時勢に従って「教育勅語」が出されると、忠孝主義の徳育方針を確定し、以後の修身教科書では教育勅語の趣旨を踏まえることが絶対条件となった。

明治初年から二十年あたりの教育の動向に目を向けると、博識な知識人や改良運動の担い手といった上層の人々は立身

出世と国民意識を唱えることに邁進し、どうにか国全体の意識を高めようと国民国家形成へ向けて政府ともども動いていたようである。そうした上層の人々は、立身出世に関する意識を持たない低識字能力者や高い書物も買えないような下層の人々にまで認識を広める手段を探っていた。『西国立志編』の訳著者である中村正直(敬字)は一八九〇年(明治二十三年)五月頃に教育勅語の草案を何度も書き直すなど、草案採用はされぬものの、教育的場面でも重視された人物である。一八七五年(明治八年)三月、女子教育に関する演説も行った。当時の文明開化という命題達成のため、人民の性質を改造すべきであると考えていた。中村の言う、徳育と宗教教育に基づく学術伝授によつて賢母を養おうという精神は、「国家のための良妻賢母」という点で森有礼と意見が合致した。つまり、当時の政府は国力高揚のため、下層社会へどのように国民意識の種を蒔こうかと試行錯誤し、一手段として江戸時代から続く庶民の娯楽、講談・落語に辿り着いた。おそらく圓朝は「三条の教憲」以降、政府の要請に従う戯作者・講談師らの動向を念頭において行動に出ており、『塩原多助一代記』刊行までの七年間にも政府の意向も汲みとりつつ時勢を鑑みた結果、後半部分では主人公多助の忍耐・勤勞・儉約貯蓄・堅実で実直な性格を描くよう方向転換したのであろう。『塩原多助一代記』は後に立身出世を説く教材として教科書へ採用されており、実際に社会的な希求があったたのは間違いない。

V 圓朝の序詞にみる物語の二分

『明治文学全集10』(筑摩書房、一九六五年六月)中の『塩原多助一代記』書出しには、「明治十七年十二月記」の速記者若林珣藏による序詞の前に、圓朝自身の序詞も載っている。圓朝の筆致によると、句点のみで区切ることで七五調のリズムがつけられ、俳諧や川柳に長じた圓朝らしい特異な文面だと分かる。角川書店版の三遊亭圓朝著『三遊亭圓朝全集…第五卷』(一九七五年)にある語釈を参照しつつ、読解を試みたい。この序詞中には、刊行した各編冊子をどれだけ売り上げ

たか意識した記述がみられる。

抑この話説の初集二集は。土竈の帕特せし事もなく。起炭の賑やかなる。場とてもあらねど後篇は。駱駝炭の立消なく。鹽原多助が忠孝の。道を炭荷と俱に重んじ。節義は恰も固炭の。固く取て動かぬのみか。獸炭を作りて酒を煖めし。(略) 始め螢の資本より炭も焼べき大竈と。成りし始末の満尾迄。御覽を冀ふと言よしの。端書せよとの。もはあれど。筆持すべも白炭や。(略) 鈍き作意の炭手前。曲り形なる飾り炭。唯管炭のくだ、しけれど。輪炭胴炭點炭と。重ねて御求めの有之様。出板人に差代り。代り榮せぬ序詞を。斯は物しつ。三遊亭圓朝記

序詞の中でも特に、出版当初の一編ごとの売り上げについて言及したと思われる部分を引用した。記述内容に目を向けると、単に前半と後半の作品構成の変化した事を受けて書かれたのではないように感じる。「初集二集は。土竈の帕特せし事もなく。起炭の賑やかなる。場とてもあらねど」と「螢の資本」とは前半の人氣への不安に言及しており、後半の「後篇は。駱駝炭の立消なく。(略) 獸炭を作りて酒を煖めし。」と「炭も焼べき大竈」と、好評と大入りを得た喜びを表している。しかし、この記述は、前半・後半各編の売れ行きを述べるにとどまらず、各編の売れ行きと物語展開を関係付けたと言いついて回しとなっている。引用部分を読み直すと、以下のように解釈できる。

最初に収録した二編は、多助が炭商として働いて商売繁昌となる場面もなく、内容としても主人公の悲劇ばかり目立ってしまい、社会的に明るく賑やかだと受け取れる場面もない。しかし後半では、質は脆いが火付きだけは良い炭(嘶の人氣を比喻した表現だろう)は消えることなく、品性(「道」とは、道德的な趣向のことだろう)を炭(「炭荷」とは、塩原太助の伝記としての説話性のことだろう)とともに大切にした。

この前半・後半の二分は、第九回を境としていることは言うまでもない。前半部の「毒婦物」的なテーマの強調から後

半部の立身出世を押し出した物語構成へと変容した。

VI おわりに

『塩原多助一代記』は三遊亭圓朝の人情噺として一八七五年（明治八）に発案され、一八七九年（明治十二）には完成、一八八五年（明治十八）には速記本刊行がなされている。物語内容を分析してみると、善悪の因果応報譚と勤労儉約者の立身出世譚という二つの教訓性を見ることが出来る。三遊亭圓朝は、一八七二年（明治五）発令の「三条の教憲」や創刊が相次いだ新聞メディアによって変動していく近代化の過渡期の一波を受けた。新聞界の要請を受けて、それまで芝居噺という小道具付きの怪談噺の口演を得意とした圓朝は、人情噺の筋を強めて素噺へと転向し、現在の噺家の定番的形式の基盤をつくり上げた。また、当時は都市新聞・地方新聞ともに多く掲載されていた怪異記事が減少する^⑥とともに、史実に基づきながらもゴシップ性の高い毒婦物を扱う〈続き物〉が巷で話題を浚う。圓朝もこれに従い、既に明治八年には新聞記事を書く文筆家としての活動を始めている。素噺へと転向し、記者として筆を執るなど、変わり身の早さには目を見張るものがある。しかし、圓朝の転身はここに留まらず、速記本刊行に影響を受けつつ、後年は噺家よりも執筆活動に重点を置くようになった。更に、速記本刊行に協力し始めた頃の流行に注目し、西欧啓蒙書からヒントを得た啓蒙書や立身出世をテーマとする翻訳書の人気の高まりとともに、圓朝もまた翻訳噺を扱いはじめるのである。こういった速記本の物語構成を検証していくことで、速記本演述者としての三遊亭圓朝の位置、そして作品の全貌が明らかになるはずである。

【参考文献】

・三遊亭圓朝著『圓朝（明治文学全集10）』（筑摩書房、一九六五年六月）

- ・三遊亭圓朝作『塩原多助一代記』（岩波書店、一九五七年六月）
- ・『ブリタニカ国際百科事典』（ティビーエス・ブリタニカ、一九八四年十月）
- ・『日本歴史大事典（一）』（小学館、二〇〇〇年六月）
- ・森統三著『新編 明治人物夜話』（岩波書店、二〇〇一年八月）
- ・S・スマイルズ著、中村正直訳『西国立志編』（講談社学術文庫）
- ・大久保利謙編『明治啓蒙思想集』（『明治文学全集3』筑摩書房、一九六七年）
- ・吉田皓二著『加藤弘之の研究』（大原新生社、一九七六年）
- ・加藤周一・前田愛校注『日本近代思想体系…16（文体）』（岩波書店、一九八九年一月）
- ・紅野敏郎ほか編『明治の文学（近代文学史 1）』（有斐閣、一九七二年六月）
- ・百川敬仁著『物語』としての異界（砂子屋書房、一九九〇年）
- ・大隅和雄ほか編集『増補 日本^{架空}伝承人名事典』（平凡社、二〇〇〇年八月）
- ・倉田喜弘校注『日本近代思想体系…18（芸能）』（岩波書店、一九八八年七月）
- ・山住正己校注『日本近代思想体系…6（教育の体系）』（岩波書店、一九九〇年一月）
- ・『第13回研究集会——「幕末・明治期における日本文学・歴史・思想・芸術の諸相」——アジア文化交流研究センター』
<http://www.csaac.kansai-u.ac.jp/syukai/3.html>（関西大学、二〇〇九年十月三日）

注

(1) 大隅和雄ほか編集『増補 日本架空伝承人名事典』（平凡社、二〇〇〇年八月）より以下に引用する。

？—一八七九（明治十二）明治期の代表的毒婦とされる人物。上州利根郡下牧村生れ、父は旧沼田藩家老広瀬半右衛門（口供書とも信州無宿の博徒鬼神の清吉ともいわれる。一八七二年、従兄で夫の波之助とともに上京、浅草藏前の旅宿で古着商後藤吉蔵を刺殺した嫌疑により七六年逮捕された。このとき二九歳であったともいう。お伝は吉蔵殺しを異母姉おかねの復讐と主張したが、東京裁判所は色じかけの殺人強盗として市ヶ谷刑場で斬首刑に処した。刑死四ヶ月後の五月新富座で『綴合於伝仮名書』（河

竹黙阿弥作)として劇化上演、お伝に五世尾上菊五郎が扮した。また仮名垣魯文作「高橋阿伝夜叉譚」も刑死直後に出版、その後、町川挿雲、那枝完二らによって読物・小説化されたが、毒婦としてのお伝はしだいに拡大され、藩校被害者も、実父清吉、黒川仲蔵、鈴木浜次郎、夫の波之助、小川市太郎らに及んだ。それら仮構の殺人罪は、江戸からの「悪婆」としてのネガティブな伝統的美化作用によって構築され、お伝の虚像が作られていったものと考えられる。(小池章太郎)

(2) 一八七九年(明治十二)出版。「鳥追阿松の伝」の翌年に一代の毒婦として紙上と世に名を馳せた高橋阿伝の一代記。(つづきもの)の草双紙を主流とする明治十年代の戯作の位置づけをすることとなる。明治十年前後、魯文が新聞主幹にあたって小新聞に連載し、世に流行した実録(つづきもの)で古来の戯作精神を否定したことにより戯作は一時的に回復。

(3) 一八七七年(明治十)十二月〜十一月一月、久保田彦作「鳥追阿松の伝」(仮名読新聞)連載。(つづきもの)を実録から小説へ移行させたのは魯文の門弟の久保田であった。後に「鳥追阿松海上新話」と改題して草双紙形式にて出版されて大当たりをとった。

(4) 立身出世は社会的に高い地位について名声を得ることを指すが、封建社会や村落社会といった身分社会においては、身分秩序を打破するものとして存在する概念である。激動の維新时期以降、社会分化が進む流動的な変動社会の中では、寧ろその要因として積極的に進められ能力ある人間は競争によって上層階級へのし上った。日本でも、明治以降、国家的な欧化政策のもとで盛んに立身出世が奨励されたが、実際には能力主義に反する私的な人間関係も無視しえなかった。立身出世の方法としては特に教育が用いられ、学歴主義の悪弊を産み落とした。また立身出世主義には、社会的不満のはけ口としても機能する側面がある。

(5) 明治初年の政治論。幕末・明治期の思想家加藤弘之の著。一八七五年(明治八)刊。総論、第一章「国家君民成立セシ所以ノ大原因」以下、「国家ノ主眼ハ人民」「天下ノ国土ハ一君主ノ私有ニアラス」「人民ノ君主政府ニ対セル権利義務」「人民自由ノ權利及ビ自由ノ精神」「国体ト政体ト相異ナル理」などの全七章からなる。

(6) 湯本豪一著「明治期の新聞にみる怪異記事の動向と諸相」小松和彦編『日本人の異界観』(せりか書房、二〇〇六年十月)参照。①十年代↓絵入新聞の消長(怪異情景の視覚化)、二十年代↓絵入新聞の衰退、③二十〜三十年代↓怪異記事は質量ともに急落、という状況を明らかにした。明治十年代は「東京絵入新聞」「絵入朝野新聞」といった小新聞が流行し、明治十年代の怪異のヴィジュアル化傾向にある。錦絵新聞衰退と絵入新聞(小新聞)へ移行してゆく。しかし、明治二十年代以降に小新聞に、怪異

記事と大々的な絵を添える方法が見られなくなり、絵入りの記事は減少。新聞は記事のための挿絵へ趣向を変え、怪異記事も三
面記事の一つやベタ記事としての扱いとなる。後、明治二十年代から三十年代、ついに大新聞と小新聞は接近・融合する。